

審査の結果の要旨

氏名 徐 笑歌

本論文は中国の市民社会組織:災害対応プロセスの「触媒」として(Chin's Civil Society in Disaster Response Process) という題目でかかれたもので、6章から構成されている。2008年5月四川大震災(中国西部)が発生し7万人の死者をもたらした。またこの災害対応において未曾有のボランティアや市民社会組織が参加した。本論文はこの2008年の地震が中国の市民社会組織(CSO)に与えた影響を吟味し、既存のCSOが災害対応へと乗り出すターニングポイントとなったことを明らかにし多数の地場発生的(Grass root)CSOを生み出したことを明らかにし、これらCSOの地震後への救急・再建への参加は以前の国が独占していた災害復興管理の方法を変えることとなったことを明らかにした。

現地調査・資料の分析から中国のCSOを中国の状況で正しく記述するにあたって従来の分析の用語は不適切であり、中国のCSOの特徴を正しく記述するフレームが必要となった。CSOの参加により地方政府、住民の変質をもたらすことがしばしば見受けられ、化学用語の「触媒」を使うことが適切な記述となることがわかった。

触媒の概念に基づき、5つの次元(identity,boundary,link,penetration,autocatalysis)を用いケース・スタディを進めている。更に、このフレームはCSOの記述に留まらず、CSOのプロジェクト管理者にとってプロジェクトを推進する道具(Toolkit)として役立つであろうと期待している。

第1章はIntroductionで世界的な市民組織の発生から現状、中国での開放経済と市民組織の関連を記述している。また、地震発生への危惧と災害対応の推移を述べている。更に論文の背景、用語の説明、論文の構成を記述している。

第2章では文献レビューとなっている。中国の市民社会論、震災の市民社会論に与えた影響。震災時のCSOの活動の記述がなされている。

第3章では中国の市民社会組織の現状、その活動内容等の分析がなされ、2008年の地震時のCSOの詳細な活動実態の調査結果が記述されている。

第4章では災害対応におけるCSOを記述するに際しての触媒理論を概念的に整理している。この結果、5つの次元の抽出とその使い方を考察している。

第5章は触媒理論に基づく5つの次元に従って、複数のケース・スタディを記述し比較を行っている。

第6章は結論

以上、震災を契機に発生したCSOがその活動を通して様々に変化している状況を触媒理論を用いて記述することの有用性を示し、CSOを推進する者にとっても活動の評価基準となることを示した。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。